The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | Saṃyuttanikāya 12.64に関する一考察 : patiṭṭhitaṃ tattha viññāṇaṃの原意とその受容 |
| Author(s) | 名和, 隆乾 |
| Citation | 待兼山論叢. 哲学篇. 2015, 49, p. 1-16 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/61337 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# *Saṃyuttanikāya* 12.64 に関する一考察

## ──patiṭṭhitaṃ tattha viññāṇaṃ の原意とその受容──

名 和　隆 乾

キーワード：*Saṃyuttanikāya* 12.64／vijñāna（識）／vijñānasthiti（識住）／
初期仏教（early Buddhism）／*Abhidharmakośabhāṣya, Yogācārabhūmi.*

## はじめに*

SN 12.64（II pp.101-104）及びそのパラレルは、識住説[1)]が四食説と結びつけられて説かれる経である。この組み合わせは、SĀc では 374-378 という複数の経に見られるが、パーリ聖典では SN 12.64 にのみ見られる[2)]（本稿執筆にあたっては SN 12.64 及びそのパラレルを参照しているが、以下では便宜上 SN 12.64 にのみ言及し、必要に応じてパラレルに触れる）。本経は縁起説発展史やアーラヤ識の成立史を議論する際にしばしば取り上げられ、従来よりその重要性が認められている。本経には viññāṇe ce bhikkhave āhāre atthi rāgo atthi nandī atthi taṇhā, patiṭṭhitaṃ tattha viññāṇaṃ virūḷhaṃ なる一文が含まれ、これは本経に説かれる識住説を理解する上で重要な箇所であるが、この文中の tattha が viññāṇa āhāra を指すか否かを巡っては、既にインド仏教史の中で異なる理解が現れている。近年でも、先の一文における tattha が何を指すかについて研究者の見解は一致を見ていない[3)]。そこで本稿ではまず、上記の一文が聖典段階では如何に解されていたかを考察する。これは換言すれば、viññāṇa は聖典段階において自身に住すると解されていたかという問題であり、二心は俱起すると解されていたかという問題とも関わると考えられる[4)]。次いで本稿は、インド仏教史中に現れた、先の一文に対する異なる

解釈として、パーリ註釈・複註、VaSg, AKBh の解釈を示す。その上で、各文献の間に見られる聖典解釈方法の相違について考察を加える。

## 1. SN 12.64の概要

まずは本経の概要を以下に示す（冒頭の数字はエディターによる段落番号）。

1-3: 四食説が述べられる。

4-7: 四食に対して熱望（rāga), 喜び（nandī), 渇望（taṇhā）があれば、viññāṇa が安住し（prati-sthā.「（或る場所 loc. を）本拠地としてとどまる、根付く」)、成長する（vi-ruh)。viññāṇa がこの様な状態にあると、生まれ変わりや苦がもたらされる。

8: 段落 4-7 の教説が、染物師や絵描きが様々な染料を用いて、板や壁に人の姿を描き出す様子に喩えられる。[5)]

9-12: 段落4-7の繰り返し。

13-16: 四食に対する熱望、喜び、渇望がなければ、viññāṇa は安住も成長もしない故に、生まれ変わることもない。

17-20: 段落 13-16 の教説が、建物の東窓から差し込んだ太陽光線が、西に壁があればとどまる（prati-sthā）が、壁が無ければ何処にもとどまらない様子に喩えられる。[6)]

21-24: 段落13-16が繰り返され、本経は終わる。

本経において四食説と識住説は、四食に対して rāga, nandī, taṇhā を抱けば viññāṇa が prati-sthā するとある様に、rāga 等を接点としている。また染物師の譬喩と太陽光線の譬喩の焦点も、rāga 等の有無に置かれていると考えられることから（cf. n.5-6)、両譬喩は、SN 12.64.7 の tattha が viññāṇa āhāra を指すかという問題に関わるものではないと考えられる。

## 2. SN 12.64.7: patiṭṭhitaṃ tattha viññāṇaṃ について

上に述べた様に、SN 12.64.4-7 では、四食のそれぞれに対して rāga, nandī, taṇhā が存在すれば、patiṭṭhitaṃ tattha viññāṇaṃ virūḷhaṃ である、とブッダが述べる。このうち SN 12.64.7 では、viññāṇa āhāra について次の様に述べられる（SN 12.64.4-6 では下記と同じ文言が、他の 3 つの āhāra について繰り返される）。なお、下記引用文では便宜上 1 文ごとに改行した。

SN 12.64.7 (II p.101).
viññāṇe ce bhikkhave āhāre atthi rāgo atthi nandī atthi taṇhā, patiṭṭhitaṃ **tattha** viññāṇaṃ virūḷhaṃ.[7)]
yattha patiṭṭhitaṃ viññāṇaṃ virūḷhaṃ, atthi tattha nāmarūpassa avakkanti.
yattha atthi nāmarūpassa avakkanti, atthi tattha saṅkhārānaṃ vuddhi.
yattha atthi saṅkhārānaṃ vuddhi, atthi tattha āyatiṃ punabbhavābhinibbatti.
yattha atthi āyatiṃ punabbhavābhinibbatti, atthi tattha āyatiṃ jātijarāmaraṇaṃ.
yattha atthi āyatiṃ jātijarāmaraṇaṃ, sasokaṃ taṃ bhikkhave sadaraṃ sa-upāyāsan ti vadāmi.

上記 1 文目に太字で示した tattha は、viññāṇa āhāra を指すか否か。一見、viññāṇa āhāra を指すと解するのが自然である。そしてその様に解するなら、続く yattha ... tattha も同じく viññāṇa āhāra を指すと解するのがやはり自然である。ところがそうすると、未来において生まれ変わりが起こるのが、現在 rāga 等の対象となっている viññāṇa āhāra の中（或いはその上）においてである、ということになってしまう。またブッダが sasokaṃ 云々と語るのが、viññāṇa āhāra においてである、となる。国内外の多くの翻訳がこの様に訳すが、果たしてこれが意味を成しているのか疑問である。或いは 1 文目の

tattha のみ viññāṇa āhāra を指し、以降の yattha ... tattha は「その際、その場合」という程で viññāṇa āhāra を指さないと解することは、不自然だが不可能ではない。だがそれより大きな問題は、tattha が viññāṇa āhāra を指す場合、四識住説との矛盾が避けられない点にある。他方、tattha が viññāṇa āhāra を指さないと解すれば、四識住説とは矛盾しない。しかし文の理解としては若干不自然に思われるし、viññāṇa の prati-sthā 先が示されていないことになってしまう。

SN 12.64.7 に関して考えられる理解の可能性はおよそ以上である。それでは聖典段階において、tattha はどの様に解されていたのか。この場合、後述する様にそれぞれ異なる解釈を示す教理文献は勿論、梵蔵漢のパラレル（cf. n.7）さえ、考察に資する所は少ない。しかし四識住説の説かれる SN 22.53（III pp.53f.）を注意して読んでみると、SN 12.64.7 の tattha は「その際、その場合」という程の意味であり、viññāṇa は viññāṇa āhāra に prati-sthā するとは解されていなかったと結論づけるのが自然であると考えられる。以下、SN 22.53 を参照してみる。

SN 22.53 では、その段落 4（III p.53）で、次の様に四識住説が述べられる：「托鉢修行者たちよ、認識機能が存立する場合に、物に達し（upaya[8)]）、物を取りつく先とし、物を本拠地とし、喜び（nandī）に潤されて存立するならば、〔認識機能は〕増大、成長、広大化に陥る（rūp'upayaṃ vā bhikkhave viññāṇaṃ tiṭṭhamānaṃ tiṭṭheyya rūpārammaṇaṃ rūpappatiṭṭhaṃ nand'ūpasecanaṃ,[9)] vuddhiṃ virūḷhiṃ vepullaṃ āpajjeyya）」。同段落ではこの文に続いて、vedanā, saññā, saṅkhārā について先の rūpa に関するのと同様の文が繰り返される。ここで viññāṇa は、nandī に潤されて（nand'ūpasecana. 異読では °upasevana「～に仕えられて」。Cf. n.9）prati-sthā するのであるが、その対象は四蘊のみである。これはよく知られる典型的な四識住説である。

続いて段落 6-10 では、諸蘊に対する rāga が打ち捨てられることにより、viññāṇa は諸蘊における patiṭṭhā を次々に失っていくとされる。その際注目されるのは、四蘊のみならず viññāṇa に対する rāga を打ち捨てることまでもが

述べられる点である。以下、viññāṇa に対する rāga を打ち捨てることが述べられる段落 10 を挙げる（段落 6-9 では他の四蘊について以下と同様の文が繰り返される）。先の四識住説では四蘊に upaya などする動作主が viññāṇa であったのに対し、以下では bhikkhu である点に注意されたい。

> SN 22.53.10 (III p.53).
> viññāṇadhātuyā ce bhikkhave **bhikkhuno rāgo pahīno hoti**, rāgassa pahānā vocchijjat' ārammaṇaṃ patiṭṭhā viññāṇassa na hoti.
> 托鉢修行者達よ、もし認識機能という要素に対する、**托鉢修行者の（または「托鉢修行者によって」）熱望が打ち捨てられたものとなれば**、熱望を打ち捨てることから、取りつく先は切り離され、認識機能の本拠地は生じない。

この文は、先に挙げた SN 12.64.7 の 1 文目との構造的な類似が注目される。SN 22.53.4 で述べられる四識住説では、viññāṇa が動作主として四蘊に upaya などしていた。ところが viññāṇa がそういう状態から解放されるには、段落 6-10 にある様に、bhikkhu が動作主となって、五蘊に対して自らの有する rāga を打ち捨てねばならないのである。ここでは、viññāṇa が upaya などするのは四蘊に対してのみであるのに対し、bhikkhu が rāga を抱くのは五蘊に対してである。つまり viññāṇa と bhikkhu との動作対象は一致しない。同様の教説は他に SN 22.3 や SN 22.54-55 にも見られ、SN 22.53 に特有な訳ではない。[10)]

従って SN 12.64.7 の 1 文目でも、rāga, nandī, taṇhā の対象が viññāṇa āhāra であっても、viññāṇa の prati-sthā 先が viññāṇa āhāra でなければならない訳ではない。むしろ SN 22.53 において、bhikkhu の抱く rāga の対象は五蘊であるが、viññāṇa が upaya し、ārammaṇa とし、patiṭṭhā とするのは四蘊であって viññāṇa が含まれない点を考慮すれば、SN 12.64.7 では、viññāṇa は viññāṇa āhāra に prati-sthā するとは解されていなかったと結論づけるのが自然であ

ると考えられる。ただ、この理解では結局、SN 12.64.7 で viññāṇa が何処に prati-sthā しているかは不明なままである。そして後述する様に、このことが実際、後代の文献に理解の相違をもたらすことになる。以上の理解に従って SN 12.64.7 の訳を示せば、およそ次の様になる。

> 托鉢修行者達よ、もし認識機能という摂取に対し、熱望が存在し、喜びが存在し、渇望が存在するならば、その際（tattha）、認識機能は安住し、成長している。
> 認識機能が安住し、成長している際、名称と形態の降下が実現する。
> 名称と形態の降下が実現する際、諸形成作用の増大が実現する。
> 諸形成作用の増大が実現する際、未来において再生の転現が実現する。
> 未来において再生の転現が実現する際、未来において誕生、老い、死が実現する。
> 未来において誕生、老い、死が実現する際、托鉢修行者達よ、その状況を、嘆きを有し、恐れを有し、苛立ちを有するものである、と私は語る。

以上の理解は SN 22.53 を参照すれば得られるものだが、先述の通り SN 12.64.7 自体は、viññāṇa は viññāṇa āhāra に prati-sthā するともしないとも解され得る文である。実際、この文を巡って、パーリ複註や VaSg と、AKBh との間でそれぞれ異なる理解が現れることになる。以下、それぞれの理解を確認していく。

## 3. 各部派における理解

### 3.1 パーリ註釈、複註

パーリ註釈（Spk II p.114）では SN 12.64.7 の 1 文目の tattha に対する言及が無い為に、その理解は明確でない。そこで他経に対する註釈を見ると、四識住に viññāṇa が含まれない理由が次の様に述べられている：「4 つ 1

セットという仕方で説示では伝承されているから、『認識機能に達して』とは語られていない。またこの様に語られている場合、『一体ここでは、どちらが業としての認識機能で、どちらが報いとしての認識機能なのか』という迷妄が生じるかもしれない。それ故にも〔「認識機能に達して」とは〕語られていない（catukkavasena ... desanāya āgatattā viññāṇ'ūpāyan ti na vuttaṃ. evaṃ vuccamāne ca katamaṃ nu kho ettha kammaviññāṇaṃ, katamaṃ vipākaviññāṇan ti sammoho bhaveyya. tasmā pi na vuttaṃ. Sv III p.1021. Spk II p.259 でも同様の説明が見られる）」。ただ、この説明は viññāṇa に upaya すると述べられていない理由の説明であるに過ぎず、viññāṇa 自身が識住となるか否かは言及されていない。

一方パーリ複註には、「tattha とは、流転において〔、という意味である〕。『摂取において』と、或る者達は〔主張する〕（*tatthā* ti vaṭṭe, āhāre ti keci. Spk-pṭ（Be: II p.115））」とある。ここでは tattha が、viññāṇa āhāra ではなく vaṭṭa（流転）を指すと解されていることが明白である。ただし vaṭṭa という語は SN 12.64 やそのパラレルのいずれにも現れない。またここではパーリ複註が、tattha を āhāra と解する者たちの存在を知っていたことが読み取れる。しかしその者たちは keci としか示されていない為に、具体的に何者を指すのかは不明である。

### 3.2. VaSg

VaSg では、SN 12.64 パラレルが直接引用される訳ではないが、次の様に述べられている。

> VaSg（蔵訳: P 'i 314b1-5; D Zi 274a4-7[11]）.
> zas bzhi po de dag yaṅ dag pa ji lta ba bzhin du ma mthoṅ ba ni dga'a ba daṅ 'dod chags gñis kyis kun nas ñon moṅs pa can du 'gyur te ... kun nas ñon moṅs pa 'di gñis kyis tshe 'di la rnam par śes pa kun nas ñon moṅs pa can du 'gyur te / rnam par śes pa'i gnas rnams la gnas nas phyi ma la yaṅ srid

par skye ba'i sa bon gyi tshul gyis skye bar 'gyur ro // skyes nas yaṅ srid par skye ba'i skye ba la sogs pa'i sdug bsṅal mṅon par 'grub par 'gyur te /
それら4摂取（zas bzhi. catvāra āhārāḥ）もろともを在りのままに見ない者は、喜び（dga'a ba. nandī）と熱望（'dod chags. rāga）の2つによって汚されたもの（kun nas ñon moṅs pa can. saṃkliṣṭa）となる ...[12] この〔喜びと熱望という〕2つの煩悩によって、この世において、認識機能は汚されたものとなる。認識機能の諸々の存立場所（rnam par śes pa'i gnas rnams. vijñānasthiti (pl.)）において存立し、来世における再生の種というあり方で増大することになる。[13] 増大してから、再生が生じること等という苦しみが現前することになる。

ここでは、四食に対して喜び、熱望があれば、認識機能がvijñānasthiti（pl. これはn.13に示した様に、四識住が意図されている可能性が高い）に存立し、増大し、生まれ変わりによる苦をもたらす、とされる。つまり喜び、熱望の対象と、認識機能が存立する場所とが別である。認識機能の存立先をvijñānasthiti（pl.）とするのは、SN 12.64及びそのパラレルのいずれにも見られない理解である。しかしこの構造はちょうど、先に見たSN 12.64における「四食にrāga, nandī, taṇhāが存在すれば、認識機能がprati-sthāし、vi-ruhする」という記述と、SN 22.53-55（III pp.53-58. 特にSN 22.54. Cf. n.13）における「viññāṇaが四蘊にupayaし、それらをārammaṇa, patiṭṭhāとして成長する」という記述を組み合わせた形になっている。

### 3.3 AKBh

AKBh（pp.117f.）では、四識住とは「有漏の四蘊（catvāraḥ sāsravāḥ skandhāḥ）」で、vijñāna自身の境地（svabhūmi）にあるもののみとされる。四識住説においてvijñānaがvijñānasthitiに含まれない理由として、まずVaibhāṣikaの説として、1. 王が王座と呼ばれないのと同様であるから、2. 船頭と船の道理により、vijñānaはvijñānasthitiと呼ばれない、との2回答が挙

げられる。[14] 続けて AKBh では、vijñāne āhāre asti nandī asti rāga iti / yatrāsti nandī asti rāgaḥ pratiṣṭhitaṃ tatra vijñānam adhirūḍham なる SN 12.64.7 の skt. パラレル[15] と、sapta ca vijñānasthitayaḥ pañcaskandhasaṃgṛhītā（PĀSĀDIKĀ (1986: p.51, [159]) によれば典拠不明）が引用され、この様な聖典の文言があるのに、何故 vijñāna は識住でないかが問われる。これに対し、AKBh は以下の様に述べる。

AKBh (p.118).

evaṃ tarhy abhedenopapattyāyatanasaṃgṛhīteṣu skandheṣu sābhirāmāyāṃ vijñānapravṛttau vijñānaṃ vijñānasthitiḥ / pratyekaṃ tu yathā rūpādayo vijñānasya saṃkleśāya bhavanti / tasmāc catasṛṣu vijñānasthitiṣu

kevalam

vijñānaṃ na sthitiḥ proktaṃ

api ca kṣetrabhāvena bhagavatā catasro vijñānasthitayo deśitāḥ /

この様な時、〔諸蘊を〕ばらばらにせずに、〔死後の〕到達先や拠り所としてまとめられた〔七識住説における〕諸蘊において、認識機能が喜び（abhirāma）を伴って活動する際は、認識機能は認識機能の存立場所である。しかし〔諸蘊は〕個々には、物等が認識機能の汚れの為になる様に〔は、認識機能は汚れの為にならない[16]〕。それ故、認識機能の４つの存立場所に関しては、

認識機能だけは存立場所だとは明言されていない

けれども、畑という在り方を通じて、世尊によって認識機能の４つの存立場所が示されている。

上記の様に AKBh では、SN 12.64.7 パラレルは、vijñāna が vijñāna āhāra に prati-sthā するとの理解が前提となっている。すると四識住説との矛盾が避けられない。そこで AKBh は四識住説との整合性を保つべく、vijñāna āhāra を四識住説ではなく七識住説における vijñāna と看做し、矛盾の回避を図っ

ている。しかしながら、七識住説は vijñāna の存立先を人間や神々などの存在形態として示す、という程の教説でしかなく（cf. AKBh pp.115-117）、vijñāna āhāra を七識住説における vijñāna とする解釈を支持する記述は含まれていない。

## 小結

これまでの考察をまとめつつ若干の考察を加え、小結とする。SN 12.64.7（II p.101）の viññāṇe ce bhikkhave āhāre atthi rāgo atthi nandī atthi taṇhā, patiṭṭhitaṃ tattha viññāṇaṃ virūḷhaṃ における tattha は、当該箇所だけ見れば、viññāṇa āhāra を指すとも指さないとも解され得る。しかし SN 22.53-55（III pp.53-58）に述べられる四識住説を注意深く参照する限り、tattha は、viññāṇa āhāra を指すとは解されていなかったと結論づけられる。そして、viññāṇa の prati-sthā 先は示されていないことになる。また本稿のこの結論では、聖典段階において viññāṇa は、自身に住するとは解されていなかったことになる。聖典段階における二心俱起への態度が如何なるものであったかは今後も議論される必要があるが（cf. 船山（2000), esp. pp.329-331）、本稿の考察は、二心は俱起しないと解されていた可能性を支持する。

後代になると、SN 12.64.7 及びそのパラレルを巡って、viññāṇa は 1）viññāṇa āhāra に prati-sthā しないとの理解、2）prati-sthā するとの理解の両方が現れた。パーリ複註、VaSg は共に 1）の理解を取るが、prati-sthā 先として前者は vaṭṭa を、後者は vijñānasthiti（pl.）を挙げる。この様な理解の相違は、tattha は viññāṇa āhāra を指さないと解した場合、viññāṇa の prati-sthā 先が不明になることに起因すると考えられる。一方、2）の理解を取る AKBh は、この理解によって生じる四識住説との矛盾を、vijñāna āhāra を七識住における vijñāna と看做す解釈を導入して避けようとした。以上の 3 者はいずれも聖典を整合的に理解しようとしている点に変わりはないが、1）は、SN 12.64.7 及びそのパラレルの記述と四識住説との整合性を最初から考慮した

理解となっているのに対し、2）は、SN 12.64.7 及びそのパラレルにおいて自然と考えられる理解を取った後で、四識住説との整合性を考慮していて、両者の聖典解釈の仕方には相違が見られる。いずれにせよ、これらの異なる理解は、聖典の文言に解釈の余地が残されていた為に、それを如何に埋めるかを巡って行われたものと考えられる。

本稿は、たった一経について、聖典段階における原意と後代における受容を辿ったに過ぎないものである。しかし本稿と同様の調査をより広範囲に行うことは、各文献の聖典解釈方法や、昨今注目される問題の 1 つである AKBh と Yogācārabhūmi との関係（cf. 佐久間（2012: pp.28f.), 堀内（2012: pp.142-144））を明らかにする一助となり得ると考えられる。

［注］

＊　本稿で用いる略号は *A Critical Pāli Dictionary* の Epilegomena に従う。その他、本稿では次の略号を用いる。AKBh: *Abhidharmakoṣabhāṣya* (Pradhan (1967)); AKUp: *Abhidharmakoṣopāyikā nāma Ṭīkā*; AKVy: *Abhidharmakośavyākhyā* (Wogihara (1932-1936); T:『大正新脩大藏經』; SĀc:『雑阿含経』; VaSg:『瑜伽師地論』「摂事分（*Vastusaṃgrahaṇī*）」。パーリ文献の底本として、SN, Nidd II, 複註は Be を、他は Ee を用いる。

1）　以下、パーリ聖典における識住説の用例をまとめておく。丸括弧内には参考までに、各用例の識住説を特徴づける語や、参考となる二次文献を記す : DN 15（II pp.68-71: 七識住と asaññasattāyatanaṃ, n’evasaññānāsaññāyatanam が並列される）; DN 33（III p.228: 四識住 ; III p.253: 七識住）; DN 34（III p.282: 七識住。ただし Ee では DN 33（III p.253）を前提に、省略される）; SN 4.3.3.17-22（I p.122. Godhika の自殺（死魔の識探し））; SN 12.38-40（II pp.65-67）; SN 12.64（II pp.101-104）; SN 22.53-55（III pp.53-58. 四識住）; SN 22.87.37-40（III p.124. Vakkali の自殺（死魔の識探し））; SN 35.194（IV pp.168-171）; AN 3.76-77（I pp.223-224), AN 7.41（IV pp.39f. 七識住）; AN 10.27（V p.53. 七識住）; Sn v.1055（cf. Schmithausen（2000: p.61））; Nidd I（I pp.25f.: 四識住及び SN 12.64 の引用）; Nidd II Be: pp.167f.（四識住（SN 22.53-55 のいずれかの引用）; 七識住（AN 7.41 の引用。そう看做す根拠は、Nidd II と AN 7.41 における Voc. が bhikkhave で一致することによる), Nidd II Be: p.206（七識住）; Paṭis I p.22（七識住）; Paṭis I p.122（七識住）; Paṭis II p.34（七識住）.

更に、cf. SN 22.3（III pp.9-12. 4 dhātu（四蘊のこと）が識の oka とされる。Cf. 谷川（1983）), Sn v.1114（d 句の enaṃ を viññāṇa と解すれば識住に関連する例となる）. この他、Nett, Peṭ, Kv でも識住説は現れるが、割愛する。

2） ただし Nidd I 等で SN 12.64 が引用される場合（下記参照）を除く。SN 12.64 パラレルについては Chung（2008: pp.120f., [40]-[44]）参照。SN 12.64 が引用される箇所は次の通り：Nidd I pp.25f.（ad Sn v.772）; Nett pp.57f.; Peṭ p.97.（SN 12.64.4 と文言が若干異なる）.

3） 例えば、Aramaki（1985: pp.93f）, 松本（2004: pp.305ff.）, Schmithausen（2014: p.285, n.1303）.

4） 二心や複数識の倶起については船山（2000）参照。AKVy（p.264）は、AKBh における SN 12.64.7 パラレルを巡る議論に註釈する中で、次の様に述べている：「しかし認識機能は認識機能と共に活動しない。〔2 つの認識機能は〕同時には存在しないからである（vijñānaṃ tu vijñānena saha na vartate. yugapad-abhāvāt）」。

5） 染物師の譬喩についてはパーリ註釈による説明（Spk II p.114）が見られる他、SN 12.64 の漢訳パラレルとして SĀc 377（T vol.2, no.99, p.103b18-22）; SĀc 378（T vol.2, no.2, p.103b29-c11）, 本譬喩を含むパーリパラレルとして MN 21（I pp.127f.）, SN 22.100（III p.152. Cf. SĀc 267（T vol.2, no.99, p.69c23-25））が挙げられる。SN 12.64 中の本譬喩については特に SĀc 377（前掲箇所）参照。そこでは、虚空には絵を描くことが出来ない様に、貪や喜が無ければ識住も起こらない、とされる。貪や喜の有無が識住の有無を左右する、ということであると考えられる。

6） SN 12.64 では太陽の prati-sthā 先として壁、地面、水の 3 つが挙げられるが、以下に示すパラレルでは 3 つ未満しか挙げられない。SN 12.64 のみが 3 つを挙げるのは、rāga, nandī, taṇhā の 3 つと対応している可能性が考えられる（パラレルでは貪、喜の 2 つ）。太陽光線の譬喩についてはパーリ註釈による説明（Spk II pp.114f.）が見られる他、SN 12.64 の漢訳パラレルとして SĀc 376（T vol.2, no.99, p.103a26-b6）; SĀc 377（T vol.2, no.99, 103b13-18）, 本譬喩のパーリパラレルとして SN 48.42（V pp.218f.）が挙げられる。SN 12.64 中の本譬喩については特に SĀc 376-377（各前掲箇所）参照。このうち SĀc 376（前掲箇所）では、西壁があれば光は西壁を照らすが、西壁が無ければ光はただ虚空を照らすのみである様に、四食に対して貪や喜があれば「識住増長、乃至純大苦聚集」があるが、貪や喜が無ければ識住は起こらない、とされる。貪や喜の有無が、識住の有無を左右する、ということであると考えられる。本譬喩については Aramaki（1985: p.94）をも参照。

7） この一文には、以下に示す様に、AKBh, SHT V 1089, SĀc, AKUp にパラレルが見られる。それぞれを比べると、SN 12.64.7 と AKBh は viññāṇe ... āhāre の様に四食を個別に述べるのに対し、SHT V 1089, SĀc, AKUp は四食をまとめて述べる、という異同がある。一方、AKBh の vijñāne āhāre asti nandī asti rāga に相当

する文は、AKUp にのみ見られる。この様に、AKBh 所引の SN 12.64.7 パラレルが、有部系とされる他のテクストと、若干だがいずれとも相違する点が注目される。以下、各該当箇所を挙げる。AKBh（p.118）: vijñāne āhāre asti nandī asti rāga iti / yatrāsti nandī asti rāgaḥ pratiṣṭhitaṃ tatra vijñānam adhirūḍham; SHT V 1089: Vorderseite（?）1: /// | eṣu caturṣv āhāre（ṣu）///（写本には四食の loc.pl. が見えるのみ。しかし SN 12.64 で āhāra の loc. が現れるのは、SN 12.64.4-7（= 段落 9-12）または SN 12.64.13-16（= 段落 21-24）である（パラレルでも同様）。写本に残るのがそのどちらに相当するかは不明だが、いずれにせよ今問題としている文脈に相当すると考えられる）; SĀc 374（vol.2, p.103a2-4）: 若比丘、於此四食、有喜有貪、則識住増長 ; SĀc 375（vol.2, 103a16f.）: 諸比丘、於此四食、有貪有喜、則有憂悲、有塵垢 ; SĀc 376（vol.2, p.103a24f. = SĀc 377（vol.2, p.103b11f.）= SĀc 378（vol.2, 103b27f.））: 諸比丘、於此四食、有貪有喜、識住増長 ; AKUp（P Tu 122b1f.; D Ju 107a2. Cf. 本庄（2014: pp.289f.））: dge sloṅ dag zas bzhi po ʼdi rnams la dgaʼa ba daṅ ʼdod chags par ʼgyur ro // gaṅ la dgaʼa ba daṅ ʼdod chags pa yod pa de la rnam par śes pa gnas pa daṅ brtan par ʼgyur ro.

8） Be: °upayaṃ; Ee, Se: °upāyaṃ. 識住説を説く他経でも同様に読みが揺れる。upăya については Schmithausen（2014: p.191, n.813; § 173.2ff.; pp.384ff.）参照。

9） Be: °ūpasecanaṃ; Ee, Se: °upasevanaṃ.

10） Schmithausen（2014: p.206, n.877）は、「upaya, nandī, rāga における僅かな相違には注意は払われていない」（趣意）と述べる。しかし、upaya は nandī が附帯（cf. nandʼ upasecana, °upasevana）することで viññāṇa に起こる動きであり、rāga が bhikkhu によって打ち捨てられることで、viññāṇa の upaya も熄む、という様に区別があると考えられる。nandī と rāga とは近い関係にあることが推測されるが、相違に注意は払われていないとまで言い切れるのか、現段階で筆者には定かでない。

11） Cf. 向井（1985: p.36）. 漢訳パラレルは T vol.30, pp.840a12-19. 蔵訳、漢訳の原文と和訳が松本（2004: pp.308-310）に示されているが、同氏の理解に対する Schmithausen（2014: pp.284f., n.1302-1305）による批判をも併せて参照されたい。

12） 中略箇所では、ここでの nandī, rāga とは何かが説明される。

13） 当該箇所の漢訳パラレルには、「令其安止四種識住増長當來後有種子」（T vol.30, p.840a18）とある。また以下に挙げる 2 つの根拠から、蔵訳中の vijñānasthiti（pl.）は、四識住が意図されている可能性が高いと考えられる。第 1 に、当該箇所より少し後で、「以前の様に、認識機能の 4 つの存立場所において（sṅa ma bzhin du rnam par śes paʼi gnas bzhir. P ʼi 315a2; D Zi 274b3f.）」と述べられる箇所があり、ここに「以前の様に（sṅa ma bźin du）」とあるのは、本脚注を付した本文が意図されていると考えられる。第 2 に、この本文では識住説と共に種子への言及が見られるが、聖典で識住説と種子の両方に言及があるのは、SN 22.54（III p.54f.）及び

そのパラレルに限られる。そしてそこで説かれるのは、四識住説である。以上から、ここでの vijñānasthiti（pl.）は、四識住が意図されている可能性が高いと考えられる。AKBh（p.118）でも、識住説と、bīja や kṣetra とが関連する文脈では四識住説が言及される。

14） Cf.『阿毘達磨大毘婆沙論』（T vol.27, pp.706c17ff. Cf. also 山口・舟橋（1955: p.62, n.2））。『阿毘曇心論經』（T vol.28, p.860b19ff.）、『雑阿毘曇心論』（T vol.28, p.935bff.）でも vijñāna が vijñānasthiti でない理由が議論される。しかしこれら 3 箇所では、AKBh とは異なって SN 12.64.7 パラレルは引用されず、従ってこれに関する議論も見られない。

15） adhirūḍham については Schmithausen（2014: p.285, n.1304）参照。ここで AKBh の引く SN 12.64.7 パラレルが、現存の有部系とされるパラレルのいずれとも少しずつ異なることについてはn.7参照。

16） AKVy（p.264）:（物等が認識機能の汚れの為になる）この様ではなく、認識機能のみ異なる。何が〔この様でないの〕か。「汚れの為になる」と〔の文言が〕期せられている。何故か。同時に依拠すること等が適合しないからである。それ故に、認識機能の 4 つの存立場所に関する説示において、認識機能だけ異なって、存立場所だと明言されていない（naivaṃ kevalaṃ pṛthag vijñānaṃ. kiṃ. saṃkleśāya bhavatīty adhikṛtaṃ. kasmāt. yugapadāśrayatvādyayogāt. tasmāc caturvijñanasthiti-deśanāyāṃ kevalaṃ pṛthag vijñānaṃ na sthitiḥ proktam）。

［参考文献］


Aramaki, Noritoshi (1985), “On the Formation of a Short Prose *Pratītyasamutpāda* Sūtra”, 『雲井昭善博士古稀記念』, 平樂寺書店, pp.87-121.

Chung, Jin-il (2008), *A Survey of the Sanskrit Fragments Corresponding to the Chinese Saṃyuktāgama* 雜阿含經相當梵文斷片一覧, 山喜房佛書林.

Bhikkhu Pāsādikā (1986), *Kanonische Zitate im Abhidharmakośabhāṣya des Vasubandhu,* Sanskrit-Wörterbuch der buddhistischen Texte aus den Turfan-Funden Beiheft 1, Göttingen.

Pradhan, P. (ed.) (1967), *Abhidharmakośabhāṣyam of Vasubandhu,* Patna.

Schmithausen, Lambert (2000), “Zur zwölfgliedrigen Formel des Entstehens in Abhängigkeit”, Hōrin, 7, pp.41-76.

———— (2014), *The Genesis of Yogācāra-Vijñānavāda: Responses and Reflections,* Tokyo.

Wogihara, Unrai (ed.) (1932-1936), *Sphuṭārthā Abhidharmakośavyākhyā*, Tokyo.

佐久間秀範（2012）,「瑜伽行唯識思想とは何か」『唯識と瑜伽行』（シリーズ大乗仏教 7）, 春秋社, pp.19-72.

谷川泰教（1983),「Sa-bhikkhu 章ノート ― Utt 15 と Dasav 10 ―」『仏教と文化 : 中川善教先生頌寿記念論文集』, 同朋舎出版, pp.147-167（再録 : 谷川泰教『沙門道の源流と展開: 初期仏教とジャイナ教の比較研究』, Ph.D. diss., 東洋大学, 1994, pp.169-187）.
船山徹（2000),「ダルマキールティの六識倶起説」『戸崎宏正博士古希記念論文集 : インドの文化と論理』, 九州大学出版会, pp.319-345.
堀内俊郎（2012),「中期瑜伽行派の思想」『唯識と瑜伽行』（シリーズ大乗仏教 7), 春秋社, pp.111-149.
本庄良文（2014),『倶舎論註ウパーイカーの研究』, 上, 大蔵出版.
松本史朗（2004),『仏教思想論』, 上, 大藏出版.
向井亮（1985),「『瑜伽師地論』の摂事分と『雑阿含経』:『論』所説の〈相応アーガマ〉の大綱から『雑阿含経』の組織復元案まで 附『論』摂事分 –『経』対応関係一覧表」『北海道大學文學部紀要』, 33, 2, pp.1-41.
山口益・舟橋一哉（1955),『倶舎論の原典解明 世間品』, 法藏館（新装版: 2012）.

（大学院博士後期課程単位取得退学／京都光華女子大学真宗文化研究所委嘱研究員）

SUMMARY

# A Study on *Saṃyuttanikāya* 12.64

## — The Original Meaning and the Interpretations of *patiṭṭhitaṃ tattha viññāṇaṃ* —

Ryūken NAWA

*Saṃyuttanikāya* (SN) 12.64 (II pp.101-104) and its parallels state the *viññāṇaṭṭhiti* theory connected with the four *āhāra*s theory (I refer only to SN 12.64 in this summary). This sutta is recognized of its importance from a viewpoint of the history of the *paṭiccasamuppāda* theory or the *ālayavijñāna* theory. It includes the following sentence: *viññāṇe ce bhikkhave āhāre atthi rāgo atthi nandī atthi taṇhā, patiṭṭhitaṃ tattha viññāṇaṃ virūḷhaṃ* (SN II p.101), and the understanding of whether or not *tattha* in this sentence points to *viññāṇa āhāra* is different among Indian exegetical texts as well as modern scholars. This paper, to begin with, discusses the original meaning of the sentence without relying on later interpretations. As a result, although *tattha* can point to either *viññāṇa āhāra* or otherwise as long as we consider only SN 12.64, when we take the four *viññāṇaṭṭhiti*s theory in SN 22.53-55 etc. into consideration carefully, it is natural to conclude that *tattha* does not point to *viññāṇa āhāra*. It means that *viññāṇa* is not established in itself (*prati-sthā*).

Next, this paper shows how the Pali commentary and the sub-commentary on SN 12.64, the *Vastusaṃgrahaṇī* (VaSg) in the *Yogācārabhūmi* (YBh) and the *Abhidharmakośabhāṣya* (AKBh) understand the sentence in question, and it further examines why their different understandings are resulted. It is noteworthy that there are different canonical interpretations between VaSg and AKBh: AKBh understands that *tattha* points to *viññāṇa āhāra,* but VaSg does not. It seems that the investigation like this paper with wider scope can contribute to the clarification of the exegetical way of the texts and the relationship between YBh and AKBh.